

## 岩永マキと石井筆子の福祉実践の時代背景

徳 永 幸 子

The Historical Background of Practice of Social Work for Children  
by Iwanaga Maki and Isii Fudeko

Sachiko TOKUNAGA

The purpose of this paper is to clarify the historical background of social work for children practiced by Maki Iwanaga and Fudeko Isii during the Meiji era. Iwanaga was Catholic, while Ishii was Protestant. Therefore, their practice of social work for children reflects the history of Catholics and Protestants.

In the early days of Catholic history in Nagasaki, Christians had experienced severe suppressions, e.g. some of them were banished, while others were arrested. Soon Catholics began charitable work to bringing up orphans. Also Iwanaga established a ko-beya called Urakami-youikuin. Three institutions for orphans were established by onna-beya, which developed into the convents in Nagasaki.

In the Protestant history the missionaries established many mission schools. Thus, Protestants contributed to female education in the Meiji era, i.e. there were not educational institutions for women established by the government. Ishii insisted on the necessity of female education and went ahead with education for female students. She had children with disabilities, so she worked at Takinogawa-gakuen which was the institution to care for disabled children, with her husband Ryouichi when there was still discrimination against children with disabilities.

The practice of social work for children by Iwanaga and Ishii was historically grounded in the work of Catholics and Protestants.

### はじめに

明治期、日本では伝統的に相互扶助が行われてきたため、公的救済・保護はきわめて不十分であった。児童保護政策は、墮胎禁止令(1868)に始まり、「棄児養育米給与方」(1871)、「三子出産の貧困者へ養育料給与方」(1873)などが制定されたが、これによって救済された貧窮児は少なかった。1874年には恤救規則が制定され、13歳以下の孤児も救済の対象となる。しかし、「人民相互の情誼」という封建的道義がうたわれ、救済対象を「無告ノ窮民」とするという強い制限的な対応がされていた。そのようななか、彼らを救済・保護したのが宗教的動機にもとづく慈善事業であった。キリスト教の本質は愛であり、貧しい人々、差別され、虐げられている人々を救済・保護することは信仰の具現化となるのである。明治期、キリスト教信仰の下に石井十次、石井亮一、留岡幸助などによって行われた先駆的な福祉実践はこんにちの福祉実践につながってきているといえよう。

長崎に生まれた二人の女性もこの時代に慈善事業にかかわっている。岩永マキと石井筆子である。この二人は人名事典ではどのように紹介されているのであろうか。朝日人物事典(1990)には二人の名はなく、新潮日本人辞典(1991)と事典近代日本の先駆者(1995)には岩永マキがあり、石井筆子はない。日本女性人名辞典(1999)、近現代日本女性人名事典(2001)、講談社日本人辞典(2001)には岩永マキと石井筆子が登場する。講談社日本人辞典では、岩永マキは、「明治-大正時代の社会事業家。浦上隠れキリシタンの農家に生まれる。浦上信徒弾圧事件で、明治2年備前岡山藩に配流される。6年帰郷し、翌年ド・ロ神父の指導により孤児の養育施設(のちの浦上養育

院)をひらく。8年浦上修道院長」と紹介され、石井筆子は、「明治-昭和時代前期の教育者。明治13年イタリア、フランスに留学。17年小鹿島果と結婚。華族女学校でおしえ、木村貞子と大日本婦人教育会を結成。静修女学校校長。36年滝乃川学園創立者石井亮一と再婚。のちに同園長」と紹介されている。

岩永マキは石井筆子より12年早く生まれ、24年早く亡くなっており、72歳まで生きた。一方、石井筆子は84歳まで生きた。二人に共通する時代は1861年から1920年であり、江戸、明治、大正の3つの時代である。日本が近代社会に向かって大きく変動していく時代を福祉実践の先駆者として生きた二人には、共通するものとしてキリスト教信仰があった。岩永マキはカトリック、石井筆子はプロテスタントの信仰を持つ。幕末・明治期のカトリックは厳しい弾圧を受けながら農民を含む庶民の間で信仰が守りつづけられ、慈善事業を展開していった。一方、プロテスタントは明治期に士族や小資本家に受け入れられ、ミッションスクールを設立するなかで日本の女子教育に貢献していった。岩永マキと石井筆子の福祉実践は、このような明治期におけるカトリックとプロテスタントの歴史のなかで誕生し展開されていったのである。したがって、その時代背景を知ることなしには二人の福祉実践を理解することはできないであろう。そこでここでは、明治期という特定の歴史的・社会的状況を二人の福祉実践とのかかわりにおいて考察するものである。なお、石井筆子の場合は、プロテスタントの歴史と関わりの深い女子教育に焦点をあてることにする。

はじめに岩永マキと石井筆子の生涯と福祉実践を簡単に辿る。つぎにカトリックがどのような弾圧を受け、それを乗り越えてどのように慈善事業を展開していったのかを長崎を中心に考察する。そして、プロテスタントが明治期にどのように受け入れられ、女子教育にどのように貢献していったのかを明らかにしたい。

## 1 岩永マキの生涯と福祉実践

岩永マキは、1849(嘉永2)年3月26日、百姓市蔵とモンの長女として浦上山里村に生まれる。浦上山里村では、本原、家野、中野、里、馬込の五郷のうち、馬込を除く四郷は全住民がキリシタンであったため、潜伏組織を作って信仰を伝承しており、マキも生まれたときからキリシタンとして育った(片岡瑠美子 1996: 35-6)。マキの曾祖父徳右衛門は、熱心なキリシタンで経済的にも裕福であったので、貧しい人々に援助の手を差しのべていたという。実家は農耕のほかにもむしろや縄を作り、かなり手広く商いをしていたので恵まれており、親は昔気質の家庭教育にきびしい人だったようである(小坂井 1985: 95)。1856年、マキが8歳のとき浦上三番崩れが起こる。「崩れ」とは、キリシタン検挙事件のことで、潜伏組織が崩壊することをいう。徳右衛門の次男三八が捕えられ、獄死する。大浦に天主堂が建設されると、キリシタン発見と呼ばれる浦上キリシタンの信仰告白が行われる。浦上村民がキリシタンであることが公然となってくると、長崎奉行所は内偵を行い、4つの秘密教会に踏み込んだ。これが浦上四番崩れである。マキの家は聖マリア堂(秘密教会)の下にあったが、この日に捕手が尋ねてきた。「貴様も天主堂から逃げてきたのだらう」と父に縄をかけた捕手に対して、男まさりのマキは「父は天主堂にいたのではありません。上の方があまりに騒々しいので様子を見に行っただけです。」と言った。しかし、胸にスカラプリオをかけているのを見つげられて連行された。聖ヨゼフ堂(秘密教会)は高木仙右衛門の持ち家でもあり、この日、仙右衛門も捕縛された。仙右衛門は、岩永マキの叔父友吉の補佐として祈りや教えを潜伏キリシタンに教えており、人格的にも信仰においても浦上キリシタンの模範的存在であった(米田 1998: 102-3)。

1868年、明治政府によって浦上キリシタン一村総流配が行われる。5月の第一次流配に続き、1869年12月の第二次流配で、マキの家族は浦上山里村の信徒とともに岡山藩に預けられ、濱野村の松寿寺に収容された。翌年10月には鶴島に送られる。鶴島ではきびしい開墾を課せられ、苛酷な生活を強いられる。「御用」と呼び出されては改心を迫られ、拷問を受けた。流配キリシタンには収

穫物の芋一切れ、野菜の一葉も与えられず、どの流配地でも、もっとも苦しかったのは飢えであった（片岡瑠美子 2004:238）。鶴島では113人のうち13名が死亡した。マキの父市蔵は、1871年3月に、妹のフイは5月に亡くなった（米田 1998:42）。マキは鶴島での自分の役割は、仲間を勇気づけるために、率先して働くことだったという。1873年にキリシタン禁制の高札が撤去され、浦上キリシタンたちが「旅」と呼ぶ流配は終わり、帰郷が開始された。マキも家族とともに浦上に戻った。岡山藩が太政官に提出した「異宗門徒人員帳」には、「まき 二十三歳 不改心」と記され、マキの一家は全員不改心となっている（片岡瑠美子 2004:238）。マキは22歳から24歳までの3年半を鶴島で過ごしたのであった。

1874年7月、伊王島に赤痢が発生し、神の島、外海をへて浦上に蔓延し、ローケーニュ、ポアリエ、ド・ロ神父たちが救護活動を行った。ド・ロ神父が救護活動の援助者を募ったとき、26歳のマキがその役を引き受けた。その彼女を手伝ったのが片岡ワイであり、守山マツと深堀ワサが加わった。4人は高木仙右衛門の納屋で共同生活をしながら、救護活動に携わった。同年8月、台風により家屋が倒壊し多数の死者が出た。さらに秋には蔭ノ尾島に天然痘が発生する。これらの救護活動を続けるなかで、マキは孤児タケと出会い、孤児たちを育てることになる。蔭の尾島のカトリック信徒の家を子どもの仮住居とし、守山マツが世話をした。1874年に浦上本原郷のサワの家を買い本格的な育児事業を始め、ここを「子部屋」と呼んだ。これが浦上養育院の始まりである<sup>1</sup>。マキは孤児救済活動を開始した理由として、「彼処此処ニアワレ親ヲ失ヒ子ヲ失ヒソノミナシゴヲ救助致シタナレバ神ノタメニモ国家ノタメニモ大ニ益ニナル事ト思ヒテコノ業ヲ盛大ニセシユエンナリ。コノ業ヲ始メシ時ハワズカニ、ニ、三人ニテ実ニ困難ノ次第ナリシガ年月ヲ経過シ今日ニ至リテハ三拾七、八名モ集リ靈魂ノ救助ノタメニ又肉体モ救助スルタメニコノ会ヲ開始ス」と書き残している（片岡 1996:40）。マキが始めた育児事業は、「靈魂の救助のために、肉体の救助のために」なされたのである。靈魂の救いは浦上キリシタンにとって「旅」の厳しい拷問に耐えるエネルギー源だった。靈魂の救いのためには肉体のいかなる苦しみも厭わず耐えぬいたのである。一人の子どもに魂の存在を信じ、子どもの魂が救われるために、いかなる事情、いかなる状態の子どもも受け入れたのである（米田 1998:95）。

高木仙右衛門の納屋での共同生活は「女部屋」と呼ばれる。ド・ロ神父はその共同生活をインドシナの「俗服の修道女」たちのようなものに発展させるために<sup>2</sup>、簡単な生活規則を作らせた<sup>3</sup>。「女部屋」で祈りに導かれ、支えられる生活は、たんなる育児事業のためだけではなかった。従順、清貧、貞潔という伝統的な修道三誓願を掲げ、一種の修道生活を志向していたのである（小坂井 1985:85）。1877年にド・ロ神父が外海に赴任したため、後任のポワリエ神父は、女部屋を準修道会として形態を整え、「十字会」と命名した。浦上十字会のような女部屋は長崎県下各地に広がり1884年までには11か所の十字会ができ、マキは45年間その会長をつとめた（米田 1998:128）。

十字会では、会員の仕事を子どもの世話と農業・機織りに分けて役割分担した。子どもの世話は深堀ワサのもとに3人があたった。農業では米、野菜、綿花などをつくり、養蚕、養鶏、養蜂なども行い自給自足であった。やがて、十字会は年々膨張する経営費を満たすために、養蚕から糸繰り、機織りまでの作業を一貫して行うようになり、会員数も20人近くになっていた（小坂井 1985:78）。1879年にド・ロ神父の勧めと資金援助で、十字会の敷地内に製糸場が建てられ、綿布は子どもとマキたちの衣類となり、絹織物は主要な現金収入となって養育費に充てられた（米田 1998:112）。明治末期には山羊や乳牛なども飼育していた。善意ある信徒からの援助は受けても、寄付を受けることは一切なかった。すべてを自分たちの労働から得た農作物とわずかの現金収入で賄ったのである。

1891年、マキは弟岩永徳右衛門方より分家し、浦上山里村1131番戸第2号の戸主となる。ここは高木仙右衛門の屋敷跡で十字会の建物があるところである。マキの戸籍に記された最初の養子は、1892年4月15日に入籍した牧次郎（生後5か月で預けられ、40日後に死亡）で、1933年までに194

名が入籍している。棄児名簿は新しく岩永姓で戸籍を作成したもので、1892年から98年までに73名が記載されており、米田綾子は戸籍簿、棄児名簿などからマキが養母となった子どもは1,834名としている（米田 1998：78）。棄児名簿には、たとえば、「棄児 岩永キヨ 推測明治貳拾五年四月拾六日生 明治貳拾五年四月拾参日拾上ケ同月貳拾八日自費養育願濟五月五日届出（朱字で）明治貳拾五年九月貳拾四日同県同郡同村平民赤瀬茂四郎養女トナル」と記載されている（小坂井 1985：9）。初期には小間物などの販売に出かけて、棄児や貧児を探しては連れ帰っていたが、活動が知られるようになるとマキの家の近くに置き去りにしたり、警察から依頼されるようになる。子どもの生存率はきわめて低く、3年以上の生存率では養子が15.9%、棄児が30.6%で、多くの子どもが生後数日から2、3か月で預けられ、2、3週間のうちに亡くなった（米田 1998：89-90）。乳児の場合、死産や乳児が死亡した家々を探して里親を依頼した。里親は、浦上、伊王島、神の島、出津などカトリックの信徒の家庭であった。また、十字会の会員だけでは子どもの養育ができなかったので数人の子守りを雇っていた。子守りはみな障害のある人で、マキはあえてそういう女性に仕事をさせて生き甲斐を与えようとしたのである（小坂井 1985：86）。1909年、マキの働きが認められ、内務省より200円の奨励金を下賜されるが、マキはそれを孤児で障害のある青年に与えて結婚させ、理髪業を開かせた（出口 1980：54）。東洋日の出新聞は翌年2月10日より8回にわたって、「慈善婆さん語る」と題してマキを紹介した記事を掲載している。1920年の正月、マキは流行性感冒にかかって県立長崎病院に入院する。数年前から胃がんを病み、入院してからの体力の衰えは急激であった。それでも、一時回復し退院したが、再発して、1920年1月27日、会員に見守られながら十字架の一室で亡くなる（小坂井 1975：97）。72年の生涯であった。

その後、本山シゲが十字会会長と院長になり<sup>4</sup>、財団法人の認可を受けて浦上山里養育院となった。組織は、院長1名、理事4名、評議員34名、教師5名、保母5名、書記1名で、全員キリスト者で、院内に起居し無給であった（生江 1931：37）。1911年以降より政府からは助成金、県からは補助金、宮内省からは奨励金を受けるようになったが、事業資金は農業によるものが大きかった。1921年7月、孤児タケの火の不始末で建物が焼失するが、その後再建され、1937年に浦上養育院と改称される。1945年8月9日の原爆では、爆心地から1キロ半も離れていない建物は倒壊し、乳児3名と会員22名が亡くなった（米田 1998：144-5）。1946年には仮建物が再建され、生活保護法による保護施設として新たに出発し、後に児童福祉施設となる。創立100周年を機に創設の地に新築され、現在に至っている。

浦上養育院の前には岩永マキと二人の子どもの立像がある。その碑文には、「明治6年キリシタン禁制が解かれ、流配地から帰郷した岩永マキは翌7年ド・ロ神父の指導のもとに同士数名とともに長崎近郊に流行した、伝染病患者の救護に献身したがそのとき残されたタケを育てたことが契機となって孤児の家「子部屋」を設立した。これが浦上養育院の前身である。マキによって始められたこの事業は日本における奉仕活動の草分けとなった」と書かれている。

## 2 石井筆子の生涯と福祉実践

石井筆子は、1861（文久元）年4月27日、大村藩士渡辺清とゲンの長女として大村に生まれる<sup>5</sup>。1867年に勤王派と佐幕派の対立による大村騒動が起こり、父親の清と叔父の昇は、勤王派の中心人物として対応にあたる。父親は鳥羽伏見の戦い、江戸城開城、奥羽戦争、若松城攻略と転戦し、大村に戻ったのは1868年12月で、指揮者の家族として筆子は心痛む毎日であった（津曲 2001：21）。翌年2月に父親は上京し、明治政府では要職を歴任し、福岡県令、元老院議官を務める。幼少期の筆子をかかわった叔父の昇は、1868年にキリシタン問題の担当となり長崎に赴任し、その後会計監査院長、大阪県令となる。筆子の幼少期は幕末から明治への変動の時代であり、勤王派の旗頭でもあった父親と叔父は奔走しており、筆子はそのような社会の動きをみて育った。1872年、それまで大村の祖父母のもとに残されていた筆子（11歳）は上京し、半年ほど大村藩主邸で藩主の娘知久

子の相手として過ごす。妹が生まれると大村藩主邸を出て父親、母親、長男環、次女文子とともに家族5人で暮らすようになる。その後、13歳のときに当時唯一の女学校である東京女学校（官立女学校）に入学する。東京女学校は1872年に設置された6年生の中等教育機関で英語を主体とした女学校であった。1875年、父親が福岡県令に任ぜられ福岡に赴任するが、筆子は学業のため東京に残り、勝海舟の屋敷内でホイットニーの娘クララから英語を習う。1877年に父親の任地福岡に行き、前アメリカ大統領グラント将軍の接待に同席する。1880年1月には東京に戻り、立教女学校のブランシェーとその夫人に英語とバイブルを学ぶ。7月には明治皇后の命で長岡護美のお付きとしてヨーロッパに行き、1年10か月滞在する<sup>6</sup>。筆子はヨーロッパ生活を通して視野を広げ、教育による女性の向上と社会の改善を生涯の目標とするのである（津曲 2001：64）。1883年11月に欧化政策を推進するための鹿鳴館が完成する。鹿鳴館時代には、筆子も舞踏会に姿をみせ、文明開化の時代の先端で過ごすのである。

1884年7月、23歳のときに親が決めた結婚相手である小鹿島果と入籍する<sup>7</sup>。翌年9月には華族女学校のフランス語の嘱託教師となり、華族女学校中学部で九条節子妃（後の大正皇后）に教える。1886年6月、長女幸子が生まれ、12月に長女とともに築地聖三一教会でウイリアムズから洗礼を受ける。筆子は華族女学校の教師として上流階級の女性の教育に従事しながら、一方では、教育による女性の地位の向上のために努力し、1888年に木村貞子らとともに大日本婦人教育会結成にかかわる<sup>8</sup>。「婦人教育の普及を図り、その徳操を養成するを以て目的とす」と規定した大日本婦人教育会は、92年に女紅学校を開校する。筆子はその創立委員であった。女紅学校は貧しい家庭の女性に職業教育を行って自立を図ることを目的としており、それは筆子の念願であった。筆子は、大日本婦人教育会雑誌99号に、つぎのような一文を寄せている。すなわち、「男女の此世にあるは云うまでもなく、同等の権利を具備するものにして、男子のために女子あるにあらざるは猶女子のために男子あらざるがごとし、若し女子の男子のために存在するとせんか、男子も其女子のために存在する者たらんのみ、世の論者、女子に高等の教育を授くるは結婚を忌むの媒となる、故に女子の教育は或程度に止むべしという、実にそは男子の僻論にして女子の心理を知らざるものの説なり、然るに今日の女子にして之を聞くも敢て怪しまざるは、数千年来因習の久しき遂に性となりて自暴自棄の念に因る者ならんか、全性全霊を献けて心身を委むべき人を見さらんか独身の生涯、何の妨げかあらん、心に適う理想の夫なき場合には、結婚を謝絶するも何の責か之あらん」と、男女の平等と女性の自立を謳っているのである。

1889年に次女恵子が生まれるが90年に死亡、91年7月には三女康子が生まれる。1892年に夫果が36歳で病死し、96年に2人の娘とともに渡辺姓に復籍する<sup>9</sup>。夫の看病のため休職していた筆子は、93年に華族女学校に復職し、幼稚部主事に任命される。その頃から聖公会が運営している静修女学校にかかわる。静修女学校の前身の開成女学館は、聖公会のニューヨーク教区婦人会の基金により、1888年に東京の神田小川町に創立されたミッションスクールであった。筆子は教師からやがて学校を主宰することになり、静修女学校と改称し、1893年に麴町五番町に移転する。校舎はイギリス人の住居をそのまま使用したもので、英語、国語、算数、歴史のほか、躰や華道、琴、人形制作、料理なども教えており、宣教師が経営するミッションスクールとは異なる特徴をもっていた（真杉 2000：16）。筆子は生徒が2、3人になり細々と運営されていた学校を生徒40人以上に成長させたが、学校の経営は筆子の犠牲によって成り立っており、昼間は華族女学校に努め、朝夕は静修女学校で寄宿生とともに過ごす日々であった。筆子がこのように女子教育にかかわったのは、日本の女性が無学のまま男性に隷属する状態におかれていることを憂い、日本がほんとうに欧米と肩を並べるためには、特に上流子女の教育が重要だという認識からであった。やがて、「国」とか「上流子女」に限った考えはしだいに薄れていき、「女性の幸せのためには、女性自身が愚かであってはならない」という信念をもつに至った（真杉 2000：16）。

筆子と亮一の出会いは1894年頃と考えられる。筆子は35歳で二人の子どもをもつ未亡人、亮一は

28歳で独身だった。亮一は孤女学院を創設しており、当時、静修女学校と華族女学校幼稚部のふたつの仕事で多忙となった筆子を助けるために、マキム主教が亮一を静修女学校の講師として紹介したのである。また、筆子に障害のある子どもがいたことも二人を結びつけるものとなった。筆子は、「今度大須賀君は愈々渡米して白痴教育の研究をして来られます。帰朝の上は貴女の二人の御子を御預かりして差し上げんと申して居られます」と言われたことを嬉しく感じたとして記している（津曲 2001：134）。亮一がアメリカで知的障害児の教育を学ぼうとしたなかには、筆子の子どもの教育が視野に入っていた。亮一の渡米中、筆子は孤女学院特別資金の募金活動の発起人となっており、静修女学校の寄宿生もたびたび寄付を行っている。亮一の帰国後、長女の幸子が滝乃川学園（孤女学院）に引き取られる。

1898年3月に三女康子が亡くなって間もなく、筆子はアメリカのデンバーで開催される万国婦人倶楽部大会に日本代表として参加することを要請される。この旅は筆子の女子教育から福祉への転機となるものであった。6月に津田梅子とともに渡米し、シカゴではジェーン・アダムスのセツメントや「棄児院」「託児所」「障害児の学校」「廃人院」などを視察する。この旅の様子は『過ぎにし日の旅行日記』に詳しく書かれている。亮一も8月に渡米し、二人はアメリカのフィルモン、ワシントンで会っている。帰国後、筆子は「一方に白痴教育、一方に孤児教育と申すことに致しまして、私が孤児教育を受け持つ」という決意を父親に申し出る<sup>10</sup>。やがて、筆子は大日本婦人教育会の活動から遠ざかり<sup>11</sup>。1899年に華族女学校を退職し、静修女学校の建物と在校生を津田梅子の女子英学塾に譲った。そして、1903年6月、筆子は麹町博愛教会で亮一と結婚式をあげる<sup>12</sup>。筆子の最初の仕事は、亮一を学園の財政面の苦難と煩雑から解放し、園児の教育と研究に専念させることであった（河尾 2002：14）。

石井亮一は、1867年、佐賀に鍋島藩士の6男として生まれた。9歳のとき、藩医の大須賀家の養子となるが、実の父母の元で生活し、1898年に石井姓に復籍するまで、大須賀の姓である。1884年にキリスト教大学として設立されたばかりの立教大学校に入学する。21歳のときに洗礼を受けるが、筆子が洗礼を受けたのは半年前であったので、ほぼ時を同じくしてキリスト教信者になったことになる。1890年に卒業と同時に立教女学校の教師になる。1891年10月28日に濃尾大地震が起こると、その孤児を聖公会の東京救貧院で救済していた亮一は、12月30日に東京下谷の荻野吟子の部屋を借りて孤女学院を設立する。孤女学院は、震災地の女子の人身売買の防止を第一に構想された。『孤女学院を訪ふ』には、「大須賀氏曰く、吾が本院を設けし目的は、徒に孤女のみを救助するに非ず。熟近時の有様を見るに、婦女の、屢其父兄或は悪党の奸計に陥りて、身を醜業に没せんとする者少なからず。故に斯くの如き者も、救助せんが為なり。」とある（滝乃川学園上 2011：104）。そして、『孤女学院設立の告白』に、「孤女は其器に随ひ、下婢となり、保母となり、女工となり、産婆となり、看護婦となり、教師伝道師となり、以上その才を慎暢するまにまに、何等女流の率先者ともならんとす」とあるように、孤女学院の目的は女子教育におかれているのであった（滝乃川学園上 2011：114-5）。孤女学院は1892年に滝野川村に移転する。1897年には滝乃川学園と改称し、新たに「白痴児」を募集して「白痴教育部」を発足させ、日本で最初の知的障害児施設（学校）となる。1906年に施設は滝野川村から北豊島郡巣鴨村に移転する。

亮一は、滝乃川学園の目的を女子教育から知的障害児教育に転換するにあたって、保母の養成に着手した。保母養成教育に関する資料は断片的にしか残されていないが、1905年の「滝乃川学園状況調査」によれば、7名の高等科修了生が、教員・保母見習いをしながら、将来「白痴教育の教師」になるために「児童心理学白痴教育学等ノ特殊ナル学科」を習得しつつあったとあり、保母養成教育が始まっていたことがわかる（滝乃川学園上 2011：486）。1912年頃からは、保母養成部として定着し、1918年までの8年間に80名を越す卒業生を出した（滝乃川学園上 2011：489）。日本において、社会福祉に従事する専門職養成のための教育プログラムが整備されたのは、1902年に留岡幸助によって巣鴨の家庭学校に付設された「慈善事業師範部」であった。1910年までの8年間の卒業

生が24名であり、卒業生が必ずしも感化事業や社会事業に従事したわけではないことと比較すると、滝乃川学園の保母養成部は実績をあげていたと言えよう（滝乃川学園上 2011：484-90）。卒業生は原則として滝乃川学園の保母として働いたが、進学したり、結婚したり、他の施設で保母になるものもあった（滝乃川学園上 2011：1012-3）。専門教育は亮一が担当し、女性としての教養や躰は筆子の担当であったと思われる。講義のテキストは亮一が自ら作ったといわれ、「治療教育技術」には、基礎的理論に基づいた具体的な指導法が展開され、主としてセガンの著書とアメリカ研修に基づく「運動・感覚訓練法」が示されている（滝乃川学園上 2011：305-6）。「画学」は、外部から非常勤講師を招いている。さらに、実習も行われており、保母養成部における教育は先駆的であったといえよう。1957年と推定される『社会福祉法人滝乃川学園要覧』には、石井亮一の死後、保母養成部は閉鎖された、とあるが、園長に就任した筆子は50周年記念事業の柱のひとつとして再興をはかった。しかし、その実態は不明である（滝乃川学園上 2011：1012-3）。

滝乃川学園は公的援助がないため、入所児童の入園料と月謝が財源であるが、それでは足りないので、養蚕事業、バザー等による資金集めが行われ、筆子の著作<sup>13</sup>の印税なども充てられた（津曲 2001：264-7）。また、皇室関係者からの支援もあった<sup>14</sup>。1916年に長女幸子が亡くなり、1920年3月には、園児の火遊びによる火災が起こり、筆子は足を負傷する。火災では6名の園児が焼死し、学園の記録、資料、文献などが焼失する。筆子と亮一は責任を痛感し学園の閉鎖を考えたが、支援者や皇后の励ましにより再建する。1920年9月、財団法人が認可される。初代理事長は中尾太一郎で、園長が石井亮一である。1928年、滝乃川学園は北多摩郡谷保村に移転する。筆子は財政面での苦境を打開するため、サフラン、スイートピー、シクラメンなどの栽培、山葵づくり、奈良漬づくりなどの事業を行ったが、収益を上げるまでには至らなかった。1932年、筆子は脳溢血で倒れ、病床につくことが多くなる。37年5月には、亮一が「壊疽性咽後間隙蜂巣織炎」で築地聖路加国際病院に入院し手術を受けるが、6月14日に死亡する。71歳であった。亮一の死後、筆子が園長となる。理事長には筆子の叔父昇の次男渡辺八郎が就任する。この年、日中戦争が勃発し、第二次世界大戦へと向かう。戦争による経済状況の悪化、国民生活の窮乏により学園の運営はきわめて困難となった。筆子は肺炎を併発して入院したり学園の寮内の小部屋で療養したりしていたが、1944年1月24日に死亡する。84年の生涯であった。

筆子が結婚するときに贈られたピアノは、1996年にデーリング社製の国内最古のピアノであることが判明した。このピアノは国立市民の協力で復元され、「天使のピアノ」と呼ばれ、復元コンサート・演奏活動が行われた。また、2002年には、筆子の出身地の大村市で、大村市・石井筆子顕彰事業実行委員会によって、「市政施行60周年記念事業」「近代を開いた女性 石井筆子」が実施された。この顕彰事業において大村小学校脇に石井筆子の胸像が建てられた。滝乃川学園は、1928年に建てられた教育建造物を修復し、2009年に「石井亮一・筆子記念館」としている。

### 3 明治期のカトリックへの弾圧と長崎における慈善事業

日本でのキリスト教宣教は、1549年8月15日にイエズス会のフランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸したことから始まる。当時の日本は戦国時代が終息に向かっていった時期で、キリスト教は農民を含む一般庶民や大名にまで広がり、1579年にはキリシタンが13万人以上に拡大していた（五野井 1990：6-7）。時代の変わりめの混乱状態の社会を生き抜くために、来世における救いととも現世での救いを強く欲求したことがキリシタン信仰受容の一要因であった（五野井 1990：12-3）。また、キリシタン大名たちはキリスト教倫理を通じて封建的支配を強化するために、信仰を自ら受け入れ、これを家臣や領民に強制していったとみることができる（五野井 1990：24）。キリシタン大名の最初は大村純忠である。大村領に出入りをしてきたポルトガル船は、1570年に領内に長崎港を発見した。長崎は純忠によりイエズス会に寄進され、キリシタン活動の中心となる（田代 1989：17）。その後、豊臣秀吉によって1587年に伴天連追放令が出される。これを受けたイエズス会宣教師たちは

平戸に集結して、以後公然の布教活動を控えた。南蛮貿易のもたらす実利を重視した秀吉はキリスト教へのそれ以上の強硬な対応は行っていない。秀吉の後をついだ徳川家康は禁教令はそのままにしていたがキリスト教は黙認していた。キリスト教が実質的に禁じられるのは1614年のキリスト教禁止令以降のことであり、それをほぼ完成させたのは、1639年の鎖国令である。この契機となるのが島原の乱である<sup>15</sup>。これ以降、ザビエルによってもたらされたキリスト教は歴史の表面から消えることになる。

近代日本において潜伏キリシタンを発見し、カトリックの基礎を築いたのはパリ外国宣教会である。徳川幕府は、1859年に5か国と結んだ修好通商条約にもとづいて、長崎、神奈川、函館、神戸、新潟を開港し、外国人居留地を許した。パリ外国宣教会の宣教師がはじめて長崎に来たのは、1863年のことで、フューレ神父、続いてプチジャン神父が赴任し、1865年に大浦に天主堂を建設した。すると、密かに信仰を守り続けてきた潜伏キリシタンが天主堂でプチジャン神父に信仰告白をしたのである。これがキリシタンの発見、復活と称されるものである。宣教師の出現と天主堂建設は、弾圧に長い間耐えてきた潜伏キリシタンにとって、強力な支持者の出現を意味した。屈辱と犠牲を重ねて秘密裡に保持してきた信仰が、優れた西欧列強の宗旨であることを知り、新たな光のもとで信仰を見直し、その意義と重要性を再認識することとなった（中村 2000：199）。大浦天主堂を訪れるキリシタンは各地から次々にやってきてその数は5万人とも推定されている（小川 2004：197）。キリシタンの発見後、浦上キリシタンが宣教師の指導を受けることはきわめて内密に行われたが、やがて明るみに出て、浦上四番崩れが起こる。崩れの最初は、1657年の大村藩の郡崩れである。郡村でキリシタン絵のありがたい説法をする人がいるから聞きに来ないかと誘ったことが代官所に訴えられ、長崎奉行から大村藩に通達されて、説法をした六左衛門祖母と関係者が大量検挙されたのである。603人が長崎、大村、佐賀、平戸、島原の5か所に投獄され、5人が斬首された（片岡 1979：537）。1658年には豊後崩れ、1644年には濃尾崩れなどが起こる。

浦上山里村は徳川幕府の弾圧開始後、キリシタン武士たちが逃れて農民となり信仰を守り続けた。村人の半数は各地から移住した武士の子孫、半数が土着の農民の子孫であった。懸賞訴人制、五人組制度、寺請制度などの励行によって集落全部がキリシタンでなければ信仰を守ることは困難であった。ほとんどの村民が表面上聖徳寺の檀家として仏教をよそおいながらキリシタン信仰を守り続けていたのである。ところが、密告によって浦上キリシタンが捕縛される事件が起こる。1790年の浦上一番崩れ<sup>16</sup>、1839年の浦上二番崩れ<sup>17</sup>、1856年の浦上三番崩れ、1867年の浦上四番崩れである。マキの曾祖父徳右衛門は浦上二番崩れで捕縛されるが、無罪放免となる。浦上三番崩れでは、最高指導者の吉蔵以下多くの指導的人物が投獄され、非道な拷問を受ける。このとき徳右衛門の次男三八も獄死した。吉蔵は牢死し、初代孫右衛門から吉蔵まで七代続いた帳方はその後置かれず、やがて1865年のキリシタン発見を迎えることになる（片岡 1979：549）。

浦上四番崩れは、1867年、4月5日、本原郷の人々が仏式の葬儀を拒否して自葬したことに始まる。そこで、庄屋は聖徳寺との関係を拒絶したい者の名簿を差し出させた。こんにち、本原郷400戸、家野郷100戸余、中野郷200戸の名簿が残っているが、それはキリシタンの大部分が聖徳寺と縁を切ったことを示すものである（片岡 1963：53）。自葬と聖徳寺との関係断絶は、寺請制度に対する抵抗であった。キリシタンは一戸当たりの耕作面積が少ないので、農業だけでは生計を立てられず、それを補うための生活防衛手段として困窮した者を扶助する伝統があった。信仰の秘匿による宗教的拘束力に加え、経済的相互扶助が信仰共同体の凝集力、団結力の物質的基盤を形成していたと思われる（中村 2000：188-9）。自葬事件をきっかけに、長崎奉行所は密偵を潜入させて浦上キリシタンの内情を探り、秘密教会で宣教師によってミサや授洗が行われていることを察知していた。7月15日の早朝、長崎奉行所の公事方掛役人が4か所の秘密教会に踏み込んだ。捕縛されたものは男女68名であった（片岡 1963：60-66）。キリスト教を信仰したという理由だけで捕縛が行われたことに居留外国人たちが抗議した。その日にプロシア領事、翌日にはフランス領事が抗議し、17日には

ポルトガル領事が長崎奉行と会見した。長崎奉行は幕府への報告のなかで、「わが国民を処断するのに各国領事に相談して取計らわなければならない理由もなく、彼らからも故障がましいことを申し立てる理由は毛頭ない」ことを強調した（片岡 1963：68-70）。8月24日には、フランス公使のロッシュと将軍綱吉との間に浦上事件についての談判が行われた。その結果は、キリシタン禁制は厳重な国法であり、それを犯した浦上村民は、国法によって処置せらるべきものであるが、外国交際の折から、拷問を加えることなく釈放し、今後新たなる捕縛は行わない、同時に浦上農民と宣教師との接触を断つ、というものであった（片岡 1963：68-70）。しかし、入牢しているキリシタンに拷問を加えないという幕府の口約は破られ、牢ではひどい拷問が行われた。ほとんどの者が棄教して釈放され、結局、残ったのは高木仙右衛門一人であった。拷問を加えないという約束が破られたことを知ったロッシュは将軍綱吉に詰問書を送った。ついに幕府は長崎奉行の職を免じ、老中から公使に遺憾の意を表明して、ようやくことが納まったのである（片岡 1963：82-5）。

1868年に明治新政府が誕生したが、新政府の浦上キリシタン問題への対応は、徳川幕府のそれと変わりがなかった。明治新政府は祭政一致の政体復古を布告し、神道を国教とすることを打ち出し、浦上キリシタンの流配を行った。1868年4月に関係諸藩に浦上キリシタンの預託が通達される。同年5月に浦上キリシタンの中心人物高木仙右衛門をはじめ114名が山口、津和野、福山の三藩に流配された。しかし残余のキリシタンの流配は、戊辰戦争によって国内が混乱していたため保留となった。浦上キリシタンの拡大や反政府的言動が中央政府に伝えられるようになると、第二次流配が行われる。この対応にあたったのが、筆子の叔父にあたる渡辺昇である。渡辺昇は、1868年8月に弾正大忠となり「耶蘇宗徒取扱」を命じられ、キリシタン大検挙を行うために長崎に下ったのである（片岡 1979：632-3）。1869年12月4日から8日にかけて立山役所に集められたキリシタンは大波戸から気船に乗せられた。6日と7日は渡辺昇もこれに立ち合っている。長崎県は岡山藩など19藩に2,810人を流配したと中央政府に報告し、太政官では渡辺昇と野村長崎県知事にあて、返書を送りその手腕を賞表したという（浦川 1973：291）。流配されたキリシタンの総数は正確には断定できないが、山田光雄の研究では3,460人とされている<sup>18</sup>。

1871年、岩倉使節団が、不平等条約改正の予備交渉と視察のため欧州諸国に派遣された。来訪したアメリカ、イギリス、フランスなどではキリシタン弾圧に対する抗議を受け、交渉は進展しなかった。諸外国の世論に抗しきれないと考えた政府は、1872年から流配キリシタンの帰村を認め、73年2月にはキリシタン禁制の高札の撤去を太政官が布告した。しかし、それは信仰の自由を認めたわけではなく、外交問題解決の方策としてであり、事実上キリスト教布教が黙認されたのである（小川 2004：202）。岩永マキも家族とともに3年ぶりに浦上に戻った。

長崎におけるカトリックによる慈善事業は、浦上養育院以外に鯛の浦養育院、奥浦慈恵院における育児事業があり、ド・ロ神父の外海での事業がある。1797年、五島藩が受け入れた大村藩外海の農民はすべてキリシタンであった。浦上四番崩れにつづき五島崩れが起こり、五島のキリシタンが迫害に耐え、ようやく宣教師を迎えることができたのは、1879年になってからである。パリ外国宣教会のフレノ神父、やがてマルマン神父が来島し、五島各地を巡回していた。1880年、マルマン神父は下五島の司牧を委ねられ、上五島をブレル神父が司牧することになった。ブレル神父は新生児の間引きや不義の子の墮胎が行われていることに心を痛め、鯛の浦で中田サヨ、中田ウメ、宇野スエの協力を得て育児事業を始める（田代 1989：41）。これが鯛の浦養育院の始まりである。浦上十字会から会員を派遣してもらい、祈りと修養、修道生活を学ばせた。1901年に谷中セヨが初代院長となり、それ以後、子どもは谷中を戸主とする戸籍に入るようになった（田代 1989：41）。

また、同年、マルマン神父は五島の大泊に民家を借りて、捨て子や私生子を保護する。やがて、手狭となったので堂崎に移転し、その施設を堂崎養育院と称した。また、教会の賄い婦をしていた浜崎ツイを中心に女部屋を創設した。このモデルとなったのが浦上十字会であり、会員を派遣したりして訓練を受けさせた。女部屋は「幼きイエズス修道会」と名づけられ、浜崎ツイが初代会長と

なり、孤児たちは浜崎の戸籍に入った（小坂井 1985：106-7）。1904年、マルマン神父と代わった堂崎の主任司祭ペルーが、亡母の遺産を投じて奥浦に土地を買い、2階建ての家を建て、そこに移転した。5年後には、財団法人の認可を受けて、名称を奥浦慈恵院と改めた（小坂井 1985：106-7）。

1881年1月には、大浦居留地にフランス人シスターたちが育児事業を開始する。これは、長崎センタンファンズと名づけられた。児童養護施設マリア園の前身である。1877年に神戸ではじまった神戸センタンファンズはプチジャン神父が名づけたもので、長崎のものは長崎センタンファンズと呼ばれ、夏には30名の子どもが入所しており、ほぼ満員になったという。1885年から97年までの子どもはすべて森姓になっているが、外国人が戸主になることはできなかったため、「長崎センタンファンズ」を手伝っていた森松次郎が引き受けたのである（米田 1998：75）。

ド・ロ神父の外海での事業は、医療救護活動、農業・漁業、建築、土木工事、移住開拓事業など多岐にわたる。ド・ロ神父が長崎に来たのは1868年6月7日であった。プチジャン神父は、印刷ができ、死を賭して日本布教に当たる神父を求めていたが、それに応じたのがド・ロ神父であった<sup>19</sup>（片岡 1977：2）。ド・ロ神父はその資産を十字会の経済的基盤作りのために惜しみなく費やした。1879年に外海に赴任すると、貧しい人々に自活の道を見出すために救助院を設立する。救助院では、製粉、機織、裁縫、パン、マカロニ、搾油などの技術を教え、学業も授けた。ド・ロ神父は赴任してすぐに、マキの浦上十字会をモデルとして聖ヨゼフ修道院を創設した。1880年には外海の大野、牧野、黒崎、檜山、平戸の田崎、佐世保の黒島にも修道院ができたが、それらは浦上十字会から派遣された女性や浦上十字会で修業した女性たちを中心として、それぞれの土地の神父によって設立されたものである（片岡 1977：7）。長崎の各地の十字会は、1956年に在俗修道会「聖婢姉妹会」となり、1975年には、「お告げのマリア修道会」となった（米田 1998：147）。1911年、ド・ロ神父は大浦に移り、司教館の改築に取りかかるが、1914年11月7日に死亡する。その墓は出津の野辺の教会墓地にある。ド・ロ神父の活動は、純粋に自己の利益をすてた隣人愛であり、人々の魂と肉体を救いたいという信仰がその根底にあったといえる（片岡 1977：118）。

田代菊雄は、明治期のカトリックの慈善事業について、浦上養育院を始めとして21の育児施設をあげており、明治20年まで、育児事業はカトリックの独壇場であったという（田代 1989：83-4）。この時期、このような慈善事業が行われたのは、キリスト教の教えから当然といえるが、直接的な動機もある。それは、仏教的供養として寺へのお布施が行われてきたのに対し、キリスト教は貧民への施与とし、これがキリシタン独特の習慣となっているのである（田代 1989：23-4）。明治初期、カトリックの慈善事業のほとんどは修道会が従事しており、自らの事業を一般に知らせないことを美德としていたこともあり、信徒や一般社会から寄付を集めることもなく、聖職者のみによって担われていた（田代 1989：23-4）。それは、カトリックはキリシタン弾圧の歴史をもち「潜伏キリシタン」の存在があったため、迫害を受けている信徒の保護と正統なカトリックの信仰に信徒を導くことが急務であり、社会や国家に対して積極的にかかわろうとしなかったからである（田代 1989：87-8）。

岩永マキの福祉実践の形成にはカトリックの歴史が深くかかわっている。カトリックの歴史は殉教の歴史といわれるが、マキが生きた幕末・明治期には過酷なキリシタン弾圧が行われた。マキは、潜伏キリシタンの家に生まれ、流配された岡岡で開墾という厳しい労働と飢えの生活を強いられ、父と妹を亡くした。ようやく戻った浦上では、赤痢、台風、天然痘などに襲われる。このような試練をへて、鍛えられていったマキの信仰は、ド・ロ神父との出会いによって「いと小さき者」へと向けられていった。蔭ノ尾島で出会った一人の孤児を育てることを決心したマキは、他の孤児たちも見捨てておくことができず、孤児たちを集め育児事業を始めたのである。それは「子部屋」と呼ばれ、のちに浦上養育院へと発展していく。マキたちの高木仙右衛門の納屋での共同生活は、「女部屋」と呼ばれ、女性たちは互いに支え合い、祈りによって日々の活力を得ていた。貧しい共同生

活はもっと貧しく苦しんでいる隣人のためのものであった（小坂井 1985：72）。キリシタン弾圧に堪えて生き抜いたそのエネルギーを孤児の救済活動に捧げたマキの信仰の強さは、カトリックの信仰の証が愛の実践にあることを明らかにしたといえるのである。

#### 4 明治期プロテスタントと女子教育

日本におけるプロテスタントの宣教は、徳川幕府が欧米諸国と修好通商条約を調印した翌年の1859年に各派の宣教師が来日したことから始まる。キリシタン禁制の高札が撤去されると、英米諸教派は続々と宣教師を日本に送った。1859年から1910年までに宣教師を派遣したミッションは、米国監督教会、英国福音宣伝教会など30に及ぶ（小澤 1964：14-5）。表向きは同国人の信仰活動を助けるためであるが、日本で宣教の準備を開始するために来たのであった。米国監督教会のC・M・ウィリアムズ、T・リギンス、米国改革教会のG・F・フルベッキらは長崎へ、同じくS・R・ブラウン、D・C・シモンズ、米国長老教会のJ・C・ヘッパァンらは神奈川へとやってきた（大内 1970：152）。これより前に宣教師が来なかったわけではないが、公に来たのはこの年がはじめてであり、その後脈絡をもち今日に至っている。G・F・フルベッキは、1864年に長崎奉行所轄の済美館の校長兼教授となり、明治政府に招かれて開成学校の設立を助け教師となり重用された（五野井 1990：250）。C・M・ウィリアムズは1887年に日本聖公会の設立に貢献する。大須賀亮一が入学した立教大学校は、C・M・ウィリアムズによって1883年に設立されたもので、亮一は設立2年目に入学したのである。そして、1886年に筆子が娘の幸子とともに洗礼を授かったのはC・M・ウィリアムズからであった。1872年には11名の日本人によって横浜に最初のプロテスタント教会である「日本基督公会」が創設される。日本人による伝導は各地に広がり、1878年末には教会44、信徒1,617名に達した（隅谷 1961：34-5）キリスト教を受け入れた人々は、明治維新の改革によって解体され没落した武士階級出身で、地方に教会が建設されるようになると、小資本家・中富農家であった（大内 1970：168）。森田清美は、「明治維新期の巨大イエ、大イエの崩壊によって生じた急性アノミー状況において、喪失からの再生をめざして青年士族がとった行動が、彼らをキリスト教入信、さらに伝導への献身に導いた」という（森田 2005：9）。

プロテスタントは明治初期の社会に浸透していったが、それは苦難と迫害の歴史であった。迫害の理由とされたのは、キリスト教は邪教で外国侵略の手先で日本古来の道徳と相容れないという点にあり、「近代」を支えるプロテスタントの倫理は、封建的、特殊日本的な倫理、習俗と激しく衝突せざるを得なかった（隅谷 1961：42）。明治政府は近代的装いをほどこしながら、天皇制を中核にしだいに中央集権的支配体制をかため、産業革命ののちは、実業家をもそのなかに擁してきわめて強力なものになっていった（大内 1970：139）。明治国家体制のなかに吸い上げられ、順応してゆくものも少なくなかったが、すぐれたキリスト者として植村正久、内村鑑三、新渡戸稲造、山室軍平などが生まれ、彼らが時代の先駆者として、宣教だけではなく、社会福祉、教育において日本の近代化に貢献したことは高く評価されよう。

日本の女子教育は、明治の学制に発するとされているが、封建時代の思想教育は広汎に根深く女子教育の土壌を彩っており<sup>20</sup>、多くの武士階級では家訓によって女子教育を行っていた。1872年7月、学制が公布され、男女の別なく、女子も8年生の尋常小学校を「必ス卒業スヘキモノトス」と定められた。「『学制』施行に関する当面の計画」は、学制公布直前における文部省の計画を示したものであり、9カ条の計画のなかには「一般ノ女子男子ト均シク教育ヲ被ラシムヘキ事」「人間ノ道男女ノ差アル事ナシ」と、男女の教育機会均等が述べられている（三井 1977：144）。同年2月に官立の女学校として東京女学校、9月には開拓使学校の付置女学校（東京芝浦増上寺境内）、3年後には文部省の招きで来日したダビッド・マレーの提唱によって東京女子師範学校（神田）が設立された。ダビッド・マレーは、女子の教育は母としてその子女を導くために必要であり、且つ女子は教育者としてすぐれているから、一般の女学校の他に女子の師範学校を興すべきである

と主張していた。ところが、東京女学校は2年後に政府の財政難で廃校となり、開沢使学校の付置女学校も76年には閉校になり、政府の取り組みには限界があった。小学校についても、女子の就学率は、1882年でも30%程度というのが実情だった（大滝 1972：52）。小学校就学率の低いこの時期、女子師範学校入学は困難であり、教師になった者は士族の娘というだけでなく、伝統的な規範から逸脱できるものに限られていた<sup>21</sup>。家父長制の強い当時においては、文明開化の先端をなすような父を持たねば、娘の社会進出は困難だったのである（深谷 1977：239）。

女子教育について文部省を動かしたのは、1871年6月の黒田清隆による北海道開拓使仮学校設立に関する建議書である。ここで提案されている女子の海外留学は11月に実現され、津田梅子ら5人がアメリカに赴いている。1868年にアメリカに渡った黒田清隆は、その文明が女子の向上に負うところが極めて大きいと思ったのである（吉田 1992：140）。日本の文明開化の目標となった国々はキリスト教文化を基盤にしている。キリスト教は神の前での人間の平等を基本としており、女性に対するそうした見方に文明の香りを感じたのであろう（深谷 1977：221）。明治期の女子教育論はアメリカのそれから影響を受けており、アメリカでは女性解放の主張に基づく社会的進出のための教育も意図されていたが、当時の日本は、これらの主張を十分に了解する段階に到達してはいなかった。急進的な思想の人々でさえ、女子教育の振興は家庭の生活を営むために有効であるという理由以外に考えることができず、男子と女子の区別を強調し、妻として母としての教養を高めることに重点を置いたのである（吉田 1992：142）。元田永孚を中心とする宮内省の儒学派は、極端な欧化主義に反対し、1887年に『婦女鑑全六巻』を刊行し女子の道徳を強調した<sup>22</sup>。1890年代までに現れた女子教育論はさまざまな特徴をもっていたが、良妻賢母を中核とする高等女学校教育の振興に向かっていた<sup>23</sup>。1902年に菊池大麓文部大臣は、高等女学校の目的として良妻賢母をあげ、職業教育は主たる任務ではないことを強調したのである（吉田 1992：172）。このような傾向に対し、矢島楫子は女子にのみ特殊な女子教育の必要性を認めず、女子にはとくに職業教育が必要であると主張した<sup>24</sup>。また、成瀬仁藏は、女子大学創立を提案し<sup>25</sup>、女子を良妻賢母として教育することを主眼とするも、必要が生じた際、一国民として自立することを女子教育の任務としたのである（吉田 1992：164）。

女子教育がようやく政策的に重要な課題となり、教育体制に組み込まれるのが明確化するのには、1899年2月に公布された高等女学校令の制定からである。そこにあらわれる教育理念は良妻賢母主義であり、この理念はこの時期が天皇制家族国家観の確立期であることと相まって、天皇制国家を支える女性のあるべき像として成立し、近代日本の女子教育の理念となり、その後の女子教育の方向を規定し律するものとして作用するのである（中寫 1984：102）。良妻賢母主義教育は、幕藩封建制のなかで主張される儒教的な女性観とも異なり、近代の欧米文明の輸入に伴って導入した女性観でもなく、明治後半期のナショナリズムの高揚のなかで成立したのである（中寫 1984：102）。小学校における女子就学率は、1899年には59.4%、1907年には96.14%となり、国家が女子教育の振興に力を入れたことは明らかである。

さて、明治初期にはじまった近代的女子教育は、主としてプロテスタントの宣教師によるものであった。宣教師たちは、キリスト教に基づく人格主義に立ち、キリスト教教育及び英語教育を通じて欧米の先進文化を伝えるとともに、近代の人間観、女性観を日本女性に訴えたのである（平沢 1996：51）。学制発布に先立つ1870年に横浜でミス・キダーによるフェリス女学校<sup>26</sup>、東京築地にジュリア・カロザースによるA6番女学校が創設され、ここから日本の近代女子教育の歴史が始まった<sup>27</sup>。71年にはアメリカン・ミッション・ホームのちの横浜共立学園（横浜）、73年にはB6番女学校のちの女子学院（東京）、75年には照暗女学校のちの平安女学院（大阪のち京都）、神戸英和女学院のちの神戸女学院（神戸）、76年には同志社女学校（京都）、77年には立教女学校などが設立された。1890年までに設立されたものは44校におよび、そのうち27校は欧化主義時代に設立されたものであった（隅谷 1961：105）。このようなミッションスクールは、英語教育から始まったものが

多く、一般的に聖書、国語の他に、理科、地理、歴史、音楽といった西洋の先進的学問があり、西洋料理や裁縫、作法、ピアノ・ヴァイオリンなども教えたといわれる（渡辺 2008：152）。キリスト教の各宗派は、キリシタン禁制が解かれたと言ってもキリスト教への偏見が強かったので、宣教を直接の目標にするのではなく、教育を通じてキリスト教の布教を目指したのである。明治政府も、条約改正のために、日本が近代国家として欧米諸国に比肩しうることを誇示する必要があり、風俗から教育、宗教に至るまで、欧米を模倣し、これによって日本の社会を粉飾しようとしたのである（隅谷 1961：85）。

当時の日本における女子教育は、封建的な男尊女卑の思潮のもとで低調であり、女子には教育は不要であるという考えが支配的であった。来日した女性宣教師たちは、日本女性が置かれていた社会的地位の低さ、女子の無教育状態に直面し、女子教育の必要性を痛感したのである。フェリス女学校の創設者のキダーは、アメリカのミッション本部に対して、「教育と共に女子に、精神的基督教感化を及ぼすことは、直接伝道以上の効果を将来に収め得る」ことを訴え続けたという（秋枝 1963：57）。当時のアメリカでは、女性の社会的地位や教育程度を高め、男女同権を求める運動が展開されており、女性宣教師を海外に積極的に派遣していたのである。女性宣教師は男性宣教師を補佐するというのが任務であり、教育を担当したのは主に女性宣教師であったことからプロテスタント諸派ミッションは女学校を競って創設したのであった<sup>28</sup>（渡辺 2008：147）。明治時代に創設されたミッションスクールは、宣教活動の一環であったばかりでなく、同時にそれは大部分の女性宣教師たちの母国であるアメリカの女学校発展運動の一環をも意味していたのである。キリスト教的教養の高い女性及び女教師を養成し、それによって家庭及び社会の教化・向上に役立てようとしたことは、19世紀アメリカ女子教育のひとつの特徴であった（秋枝 1963：57-9）。しかしながら、多くのミッションスクールは、ごく一部の中流及び上層階級の子女のための教育機関と化してしまった。1871年に横浜に創設された横浜共立学園は、当時見捨てられた混血児を救うために宣教師バラがアメリカの教会及び友人に訴えて設立されたものであったにもかかわらず、創設当初の意図は消えて、他のミッションスクールと同じようになってしまい、東洋英和女学校は、鹿鳴館時代は、岩倉、伊藤、西郷、伊達、陸奥、本野などの子女や木戸、後藤、斎藤、寺内夫人などの名門が在学していたのである（碓井 1969：34-6）。

明治10年代に発展したミッションスクールは、20年代になると衰え始める。欧化主義にかわって国家主義が台頭すると、欧化主義の時代に歓迎されたキリスト教は排撃されるようになる。その影響で、ミッションスクールの入学者が減り、中途退学者が増え、在學生は著しく減少した。1890年の教育勅語発布以降、国家主義傾向の強化に伴い、キリスト教教育への非難が強くなり、内村鑑三の不敬事件などが起こる。さらに、1899年には文部省訓令第12号によって、官公立学校の学科課程に準ずる学校においては、一切の宗教教育を禁止することが命じられ、ミッションスクールに大きな打撃を与えた。1893年にミッションスクールは48校、官公立女学校は8校であったのが、1913年にはミッションスクールが42校に対し、官公立女学校は260校となり、日本の女子教育の主導権を握ったのである（秋枝 1963：56）。1890年から94年頃にかけて、多くのミッションスクールはより一般的な良妻賢母養成の目的に切り変えることで、日本社会から消え去ることを防ぎ、日本社会に適合する道を見出そうとしたのである。1891年の「神戸英和女学校入学案内」には、「本校の目的は…キリスト教の道徳により智徳を併進せしめ他日良妻賢母たらしむる事を期す」とある（碓井 1969：41）。ミッションスクールが鹿鳴館期の絶頂期を経て、明治20年代の苦難の時期を切りぬけて、定着への道を見出したのは、学校経営の日本化を図ったことがある。その改革を最初に行ったのは立教女学校である。立教女学校の日本人教師は、外国人宣教師の支配する教育方針に不満を抱き立教女学校同志会を結成していたが、1891年来日した聖公会監督ヘヤーとの話し合いの結果、米国人を養成するのではなく日本人を養成するという認識をもつに至った（碓井 1969：43）。宣教師たちがこのような日本的教育の必要性を認識したのは、ミッションスクールの歴史において始めてで

あり、ミッションスクールは学校経営の日本化により危機を乗り越え、その教育内容と目的において日本の土壌に定着したのである。また、明治20年代に官公立の女子高等教育は、女子高等師範学校のみであったなか、それより早くフェリス女学校は1882（明治15）年に高等科を設置し、活水女学校は1889年に高等科の第一回卒業生を輩出し、神戸英和女学校は1891年にアメリカMount Holyoke Collegeと同程度の高等科を設置していたのである（碓井 1969：43）。女子高等教育の必要性が一般に認識されていない時期に、ミッションスクールが高等科を設置していることは女子高等教育の嚆矢的役割を果たしたといえよう。明治期の日本の近代化過程において、プロテスタントが先進的な西洋文明をもたらし、近代的女子教育に果たした役割は極めて大きい。多くのミッションスクールによって公的に立ち遅れていた女子教育が推進されたことは、女性史において特筆されるべきことである。また、ミッションスクールの卒業生が女性解放運動の先駆者となっていったことは、プロテスタントが日本社会に新しい女性観をもたらしたともいえるのである。

明治期に日本に入ってきた西洋思想・文明とプロテスタントは、石井筆子の人生に大きな影響を与えた。大村藩士の家に生まれ、政府の要職を歴任する父親のもとで、当時唯一の官立女学校に学び、西洋文明に触れながら育った筆子は、26歳のときに洗礼を受ける。すでに19歳のときにヨーロッパに留学していた筆子は、38歳のときにも万国婦人倶楽部大会日本代表として渡米する。筆子は欧米の女性を知るなかで、教育によって日本の女性の地位を向上させなければならないという信念を持つのである。男尊女卑の時代に女性が男性と対等であるべきことを主張し、上流階級だけではなく貧しい女性の教育にも取り組んだことは革新的な意味を持っていたといえよう。華族女学校、大日本婦人教育会、女紅学校、そして、ミッションスクールである静修女学校における働きは、日本における女子教育の先駆的なものといえる。やがて、大須賀亮一と出会ったことが筆子の人生を大きく変えていく。女子教育者としての道から福祉実践者としての道へと転換していくのである。明治時代は知的障害児への公的支援が全くなく、その家族は差別や偏見のなかに置かれていた。滝乃川学園はそのようななか日本で最初の知的障害児施設として創設され、日清戦争、日露戦争、太平洋戦争を押し進めた軍国主義に抗って、知的障害児を守り続けたといえるのである。恵まれた環境のなかで育った筆子の滝乃川学園での生活は極めて質素なものだったという。障害児の母として、女子教育の先駆者として、福祉実践者としての筆子の苦難の人生を支えたのは、強い使命感と信仰であったといえるのである。

## おわりに

明治という疾風怒濤の時代、孤児や知的障害児への公的救済・保護がきわめて不十分な時代に、カトリックとプロテスタントの歴史を背景にして、岩永マキと石井筆子の福祉実践は展開されていった。浦上養育院も滝乃川学園も創設の理念はこんにちまで受け継がれてきており、福祉実践の理念が失われつつある時代にあって、二人の福祉実践の意義は再評価されなければならないであろう。しかしながら、現代という時代において信仰という内面的課題や使命感はどのように追体験されるのであろうか。サラリーマン化している社会福祉従事者にとっては、それを追体験するのは容易ではないであろう。岩永マキと石井筆子が過酷な時代のなかで、信仰によってその苦難を乗り越えていったことをそのまま現代の社会福祉従事者に求めることはできないが、二人の福祉実践が歴史のなかで受け継がれ、普遍化されるならば、それは福祉実践の新しい創造につながっていく途となるのではないだろうか。

吉田久一は、本当の意味での福祉実践とは、社会福祉行政と利用者への援助との矛盾、管理者としての自己と施設従事者との衝突、自分の生涯を賭けた利用者に裏切られたりしながら、その矛盾が社会化され、論理化され、自分を社会的人間に変革していくことであるという（吉田 1973：298）。また、社会福祉の実践を、歴史的社会的実践、専門的機能的実践、経験的実践に整理し、本質的な歴史的社会的実践が、専門職業的技術の効果を利用しつつ、個別な現象である問題解決を現

場で行うことであるという（吉田 1989：3-4）。社会問題を解決していくことを課題とする歴史的社会的実践は、現象としてあらわれる個人のニーズの本質に社会問題があることを明らかにする。明治という時代において、岩永マキと石井筆子の福祉実践は、慈善事業という範疇において社会的視点に欠けるという限界をもっていったことから、今後は、社会性という視点からその福祉実践を検証していくことが必要である。

また、二人の福祉実践の先駆性や革新性に着目するとき、現代においてはどのようなことが先駆的であり、革新的であるといえるのだろうか。時代は常に変化していく。そのなかで、二人の福祉実践から受け継いでいくものを見極め、あるべき社会を見据えて、福祉実践のありようを考えていくことを今後の課題としたい。

## 注

<sup>1</sup> 1890年の長崎県「感化事業に関する調」では、浦上山里村婦人同志育児所と記載され、1912年の留岡幸助日記には、浦上山里養育院と記載されている。

<sup>2</sup> パリ外国宣教会の宣教地インドシナでは、いわゆる「俗服の修道女」の一団が田畑を耕し、木綿を織り、一般庶民と変わらない仕事に携わりながら、祈りを中心とした共同生活を送り、教会と隣人への奉仕に活躍していた。

<sup>3</sup> その生活規則はつぎのようなものである。一外出する時一人出ずること出来ず二人以上外出すること、二我が家に泊まる事は許されず、三親が死しても家に行く事出来ず、四何のご馳走にも行く事出来ず、五金銭の貸借は出来ず、六衣服は黒足袋に三幅の前掛 髪飾りは禁ず、七手紙は許しなく往復できず出す時は検査を受くる事、八会員が子どもを抱いて外出し又は子どもをとまらせる事出来ず、九門より内に男を入れる許しなし、十患者を看護する時は男女何れのためにも女二人づつである、十一着物金銭等を我が内に求むること出来ず、十二捧の祈りは毎日一遍づつ唱える事、十三神父様に用事ある時は証拠人なしに会う事出来ず、十四会の事情は親兄弟にでも決してもらす事出来ず。

<sup>4</sup> 米田綾子、小坂井澄によると2代目院長は本山シゲとされているが、生江孝之によると松尾トメとされている。

<sup>5</sup> 1865年とする文献もあるが、亮一との結婚に関して、筆子が7歳年上であることが問題となりせめて2歳年上ならよいだらうと考えられ、生まれた年を1965年とし、叔父昇の計らいで戸籍もそのように直されたのである。筆子はこのことを1942年に親戚に宛てた手紙で告白している（津曲 2001：242-5）。

<sup>6</sup> 長岡護美は、旧熊本藩主細川斉護の六男で、英米に留学しイギリスの法廷弁護士資格もあり、1879年に帰国していた。同年、旧大村藩主大村純熙の六女知久子と結婚しており、1880年3月にオランダ駐在特命全権公使に任命された。筆子は形の上では知久子夫人のお付きとしての訪欧であったと思われるが、皇后からの特別な使命があったのではないだろうか（津曲 2001：60）。

<sup>7</sup> 小鹿島果の父は大村藩の家老を務め、果は嫡男であった。果は幼児期から神童と言われ、慶応義塾、大学南校、工部大学校を経て、工部省鉱山局に勤務した。優秀な官吏であると同時に学究の人で、『日本食志』『日本災異志』などの名作を残している。

<sup>8</sup> 1887年1月に「東京婦人教育懇談会」が結成され、幹事に木村貞子、棚橋絢子、水野峰子、小鹿島筆子がいた。翌年に「大日本婦人教育会」へと発展した。会長が毛利公爵夫人、副会長が鍋島侯爵夫人で、名誉会員には、大村憲子、長岡知久子、渡辺千施子（父清の後妻）、渡辺生子（叔父昇の妻）など、筆子の関係者が名を連ねている（大村市 2002：36）。

<sup>9</sup> 果は大村の名門小鹿島家を継いでいた。家督を絶やさないために本来ならば娘の一人に婿養子を迎えることになるが、病弱の娘ではそれができず、果の弟が果の養子となって小鹿島家を継いだ（津曲 2001：117）。

<sup>10</sup> 父親は筆子の決意に同意したが、筆子が亮一と結婚することには反対した。津田梅子は、そのことをアメリカのランメン夫人宛の手紙に、「渡辺婦人の結婚は以前より遠のいているように思えます。彼女の父上は勿論のこと、全ての家族がこの組み合わせに強く反対しています。私には、その実現は困難なのではないかと思われます」と書いている（津曲 2001：148,238-9）。

<sup>11</sup> 大日本婦人教育会は、1899年から少年少女のための「談話会」を開き、巖谷小波が童話を口演し、坪内逍遙、戸川残花らも出演している。また、女学生を対象とした「女塾」や「家政」「源氏物語」「歴史」「料理」などの講座を開設し、貧しい女性のための教育より子どもや女学生を対象とした教養講座、上流婦人の教養と趣味の性格を強くするようになり変質したのである（津曲 2001：229-30）。

<sup>12</sup> 結婚式の媒酌人は岡部長職であった。岡部長職は旧岸和田藩主で子爵だった。エール大学とケンブリッジ大学で学び、帰国後、外交官として活躍した。1886年に小崎弘道らと番町教会を設立し、1897年に東京府知事、1908年に法務大臣となっている。教育と社会事業に理解があり、娘が筆子の教え子であった関係で滝乃川学園のよき理解者であった（津曲 2001：243-44）。

<sup>13</sup> 現在、活字として残っているのは、『火影』（1920）、童話集『自然界とおとぎばなし』（1924）、『過ぎにし日の旅行日記』（1932）、『もしほぐさ』（出版年不明）の4冊である。その他に原稿として残されているものや『大日本婦人教育会雑誌』に署名論文として掲載されたものがある。無署名で活字になったものとして、1910年からの『学園のまとめ』、『滝乃川学園のその日その日』があり、学園の出版物、記録類の中に筆子によるものが相当あると想像される（津曲 2001：346-56）。

<sup>14</sup> 華族女学校での教師経験から皇室関係者の支援が寄せられた。1919年、貞明皇后は学園の現状を視察させて、金1,000円を下賜し、1913年には明治天皇崩御に際して金2,000円の下賜があった。

<sup>15</sup> 鳥原の乱は、苛酷極まる悪政に生活権を奪われた農民の生活闘争であり、農民一揆であった。しかし、その団結の力は信仰にあった。キリシタン弾圧と鎖国を強行しようとしていた幕府にとって、この大乱はよい口実となった（片岡 1979：532）。

<sup>16</sup> 円福寺に八十八体の石仏を造立するための喜捨を村民の多くが拒否したことから、里郷忠右衛門ら19人をキリシタンとして密告したが、証拠不十分となり密告者が処分された（片岡 1979：542-4）。

<sup>17</sup> 転びキリシタンの密告によって、浦上キリシタンの秘密組織の最高指導者の利五郎など村民の中心的指導者が捕えられた。取り調べの記録はなく、浦上キリシタンの名簿を長崎奉行所に勤務していた益田土之助が持ち出し、信徒弾圧をやめさせたようである（片岡 1979：545-6）。

<sup>18</sup> 浦上一村総流配の名簿は3分冊に分かれ、「公文録」と「太政類典」の2冊は国立公文書館に、他の1冊は外交文書館に保管されている。その他の史料も合わせて検討し、浦上村の流配者数を3,347人と算定している。

<sup>19</sup> 浦上キリシタン発見により、キリシタンの信仰を正しく導くとともにキリシタンが異和感をいだかないために、プチジャン司教は、16、7世紀のキリシタン時代の信仰書や教理本、祈祷書を作る必要を感じていた（田代 1989：46）。

<sup>20</sup> 江戸時代に女子のための教科書として、「実語教」「女小学」「女四書」「女中庸」「女論語」「教女子法」などが出されており、広く行きわたっていた。

<sup>21</sup> 野口幽香は、備前岡山藩の下級士族で、文明開化に理解の深い父を持つ。林歌子は大野藩の下級士族で、蘭学修業の夢が挫折した父が歌子に期待を託したのが福井女子師範学校入学の契機となった。津田梅子の父は洋学者で、キリスト教徒や各界に知人の多い津田仙であり、矢島揖子の父は横井小楠の門弟で徳富家と親戚関係にある（深谷 1977：239）。

<sup>22</sup> 『婦女鑑全六巻』は、華族女学校の校長の西村茂樹が皇后の女子教育への特別の思召しを受けて撰じたものであり、皇后はこれを華族女学校に下賜し、教科書として採用され、やがて全国の高等女学校に配布された（三井 1977：29）。

<sup>23</sup> 1891年に発行された『女鑑』という雑誌は、「貞操節義なる日本女子の特性を啓発し、以て世の良妻賢母たるものを養成するを主旨と」して、はじめて良妻賢母を打ち出したものとみることができる。

<sup>24</sup> 1903年の博文館による『女学生の栞』に「女子教育の方法」と題して述べられている。

<sup>25</sup> 成瀬が女子大学を主張するひとつの論拠は先進国の実例である。「米国では大学と称するものは357校で、其中女子に入学を許すものは実に337校」という（吉田 1992：165）。

<sup>26</sup> キダーは、アメリカ・オランダ改革派教会から派遣された宣教師で、ヘボン夫人が経営していた男女共学の塾を引き継ぎ、やがて女子部を独立させた。初めは14-17歳が7名、8-10歳が5名の小さな私塾に過ぎなかったが、1年後生徒数30名に増えた。神奈川県令大江卓の協力で、居留地外にある伊勢山の県庁官舎の一つに移転した。その後、中区山手178番地に校舎と寄宿舎を建て、フェリス・セミナリーを開校した。翌年、フェリス女学校と称することになった（平沢 1996：51-2）。

<sup>27</sup> このとき、男子のミッションスクールは設立されていなかった。明治期に創設された男子校は24校であった。男子教育の特徴とされる「立身出世」主義においては、政府内や一般社会に猜疑や反感を持たれているキリスト教主義学校に学ぶことは、不利と考えられたのである（秋枝 1963：52-4）

<sup>28</sup> 明治年間に男子のためのミッションスクールは、24校創設され、閉校等で最終的に15校が残った（渡辺 2008：144）。

#### 参考文献

- 秋枝蕭子（1963）「キリスト教系女子教育研究のしおり－明治時代プロテスタント系女学校について－」『文芸と思想』25
- 家近良樹（1998）『浦上キリシタン流配事件 キリスト教解禁への道』吉川弘文館
- 石井筆子（1932）『過ぎし日の旅行日記』東京滝乃川学園印刷所
- 一番ヶ瀬康子・津曲祐次・河尾豊司編『無名の人石井筆子』ドメス出版
- 出口方子（1980）「岩永マキ」五味百合子編『続社会事業に生きた女性たち－その生涯としごと』ドメス出版
- 碓井知鶴子（1969）「明治のキリスト教女子教育の定着過程－明治20年代を中心に－」東海学園大学紀要6
- 浦川和三郎（1973）『浦上切支丹史』図書刊行会
- 大内三郎（1970）「日本プロテスタント史」海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』日本基督教団出版局
- 大滝晶子（1972）「明治期のキリスト教主義女学校に関する一考察」『教育学雑誌』6
- 小川小百合（2004）「キリスト教と明治維新」太田淑子編『日本、キリスト教との邂逅－二つの時代に見る受容と葛藤』オリエンズ宗教研究所
- 小澤三郎（1964）『日本プロテスタント史研究』東海大学出版会
- 河尾豊司（2002）「知的障害児の教育・福祉と石井筆子」『近代を拓いた女性－いばら路を知りてさげし 石井筆子の生涯』大村市・石井筆子顕彰事業実行委員会
- 片岡弥吉（1963）『浦上四番崩れ』筑摩書房
- 片岡弥吉（1977）『ある明治の福祉像 ド・ロ神父の生涯』日本放送出版協会
- 片岡弥吉（1979）『日本キリシタン殉教史』時事通信社
- 片岡瑠美子（1996）「浦上キリシタン」『長崎文化 第54号 特集続長崎の女たち・男たち』長崎文化協会
- 河尾豊司（2002）「知的障害者福祉施設創設者の生涯と思想（石井亮一・筆子）」高橋幸三郎編著『知的障害をもつ人の地域生活支援ハンドブック』ミネルヴァ書房

- 小坂井澄（1985）『お告げのマリア 長崎・女部屋の修道女たち』集英社
- 五野井隆史（1990）『日本キリスト教史』吉川弘文館
- 隅谷三喜男（1961）『近代日本の形成とキリスト教』新教出版社
- 滝乃川学園・津曲祐次監修・編集（2011）『知的障害者教育・福祉の歩み 滝乃川学園百二十年史上』大空社
- 滝乃川学園・津曲祐次監修・編集（2011）『知的障害者教育・福祉の歩み 滝乃川学園百二十年史下』大空社
- 田代菊雄（1989）『日本カトリック社会事業史研究』法律文化社
- 田辺敦子（1973）「石井筆子」五味百合子編著『社会事業に生きた女性たち－その生涯としごと』ドメス出版
- 津曲祐次（2001）『シリーズ 福祉に生きる49 石井筆子』大空社
- 津曲祐次（2002）『シリーズ 福祉に生きる51 石井亮一』大空社
- 中郷邦（1984）「女子教育の体制化－良妻賢母主義教育の成立とその評価」『講座日本教育史 第3巻 近代Ⅱ／近代Ⅲ』第一法規出版
- 中村博武（2000）『宣教と受容－明治期キリスト教の基礎的研究』思文閣出版
- 生江孝之（1931）『日本基督教社会事業史』
- 平沢信康（1996）「近代日本の教育とキリスト教(5) 明治初期・欧化主義の時代におけるキリスト教女子教育」『学術研究紀要』15
- 深谷昌志（1977）「男女共通教育の構想と挫折」『世界教育史大系34 女子教育』講談社
- 眞杉章（2000）『天使のピアノ』ネット武蔵野
- 三井為友編（1977）『日本婦人問題資料集成 第4巻 教育』ドメス出版
- 山田光雄（1993）『帰ってきた旅の群像 浦上一村総流配者記録』聖母の騎士社
- 吉田久一（1973）「『社会事業に生きた女性たち－その生涯と仕事』によせて」五味百合子編著『社会事業に生きた女性たち－その生涯としごと』ドメス出版
- 吉田久一（1989）『日本社会福祉思想史』川島書店
- 吉田昇（1992）「明治以降に於ける女子教育論の変遷」『日本教育史基本文献・資料叢書 女子教育特輯』大空社
- 米田綾子（1998）『シリーズ 福祉に生きる14 岩永マキ』大空社
- 渡辺良智（2008）「ミッション・スクールの女子教育に関する一考察」青山学院女子短期大学紀要